校長室だより～燦燦～ №５０４

２１世紀のピカソ

2022.2.15

２０世紀の天才的画家と称されるパブロ・ピカソ、誰もが知っている有名な画家の一人だろう。もし彼が、この２１世紀初頭に生まれたならば、おそらく彼は、「絵」を描かないのではないかという人がいる。一人の「表現者」がいかなる才能を開花するかは、その時代に存在する、いかなる表現メディアと巡り会うかによって決まるというのである。

私の絵画鑑賞は、オリエンテーリング的鑑賞だった。有名な美術館に行き、有名な絵画を実際に見たことが大事なのであって、その作品と対話し、味わうことなどなかったように思う。要は、美術のことがわからないのである。絵画の味わい方というものを知らないのである。有名な美術館がある。私にとってそれは行かなければならない存在となる。

そんな私だが、数年前に福島県立美術館で「伊藤若冲展」が開催されたときに、ある変化が起きた。作品をずうっと見ていき、最後のフロアに入り、これで最後かと思ったところ、眼前に大迫力のメインの作品が迫ってきた。その作品は、いつまで見ていても飽きなかった。私でも、何かを感じることができた。

それ以来、絵画作品を見ると、じっくり味わおうとする自分がいる。有名な美術館や有名な作品でなくてもいいのである。自分なりに、作品と対話できているような気がするのである。気のせいかもしれないが。

思えば、ずいぶんともったいないことをしてきた。ルーブル美術館で『モナリザ』を見た。「ん～、この作品は違うぞ」とは思ったが、先入観なのかもしれないと思った。ミラノで『最後の晩餐』を見た。「ん～、これか」何が良いのか、わからなかった。いずれも、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品である。何だかすごいのはわかるのだが、何がすごいのかは、よくわからなかった。

きっと、今、改めて見てみると、いずれの作品も全く違ったように見えるのではなかろうか。もう一度、見てみたい。他にも、もう一度見てみたい作品が、たくさんある。イタリアであれば、ミケランジェロにラファエロ、ボッティチェリもそうである。フランスであれば、モネ、ルノワール、ミレー、セザンヌ、ゴーギャンなどである。オランダであればレンブラント、そして、何といってもフェルメールである。

もし、２１世紀という時代に、ピカソのような人物が生まれたならば、その人物は絵を描くとは限らない。写真や映画、イラストやグラフィック、漫画やアニメ、立体映像やＣＧなど、様々な表現メディアのうち、いったいどのような分野で才能を発揮するのだろうか。

無数の表現メディアが生まれる２１世紀とは、無数のピカソが生まれる時代なのかもしれない。それはそれでいいのだが、やっぱり絵がいい。今さらながら絵画がいいのである。ピカソのような絵が、そう易々と世に出るとは思えないが、楽しみでもある。

それまでは、オリエンテーリング的絵画鑑賞はやめにして、じっくりと作品と向き合い、対話する時間を大切にしたい。そのためには、少なくともイタリアに１か月いや２か月、フランスにも１か月いや３か月はいなくてはならない。そもそもルーブル美術館は、くまなく見るためには１か月かかると言われていた記憶がある。美術館に泊まりたいくらいである。

そう考えると、退職後の話となる。まだまだ先のことである。２１世紀のピカソは楽しみだが、やっぱり２０世紀のピカソがいい。老後の楽しみが一つ決まった。美術館巡りである。ただし、オリエンテーリングではない。作品との対話、画家との対話の旅である。